治療抵抗性統合失調症における、抗精神病薬による改善のタイムコース

Time course of improvement with antipsychotic medication in treatment-resistant schizophrenia.

鈴木健文[1]、Gary Remington[2]、Tamara Arenovich[2]、内田裕之[1,2]、Ofer Agid[2]、Ariel Graff-Guerrero[2]、and David C. Mamo[2]

1 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

2 Centre for Addiction and Mental Health, Toronto, Ontario, Canada

The British Journal of Psychiatry 2011; 199(4):275-280

【背景】

治療反応性を示す統合失調症例において、抗精神病薬による治療効果が早期に顕れる可能性が示唆されているが、治療抵抗例においてこの点を評価した先行研究はない。

【方法】

著者らは PubMed、Ovid Medline、EMBASE、PsycINFO を用い、'treatment resistant (refractory) schizophrenia'、'double blind'をキーワードとした文献検索を行った。治療抵抗性統合失調症を対象とした二重盲検試験を調査し、メタ回帰解析を用いて抗精神病薬治療による改善のタイムコースを吟味した。

【結果】

同定された 19 試験における試験期間は 4 週間−1 年、治療反応率は 0%-76%と大きく異なっていた。治療開始後 6 週間の間に、3 回以上 BPRS または PANSS 総点を報告した 5 報を対象に、メタ回帰解析を行った。該当試験の平均アイテムスコアは 3.4 であり(PANSS 総点 102 に相当)、疾患重症度は 5.2(顕著)であった。全抗精神病薬に関しては、4 週目までのスコア低下(改善)が有意であり、改善のおよそ 2/3 が最初の 3 週間で認められた。しかしながら、後半 3 週間のより少ない改善でも、PANSS で 5.1 ポイント低下に相当した。また総点の 20%改善は 4 週で認めたものの、30%の改善は 6 週間までには認められなかった、一方、クロザピンでは 6 週間の治療期間を通して、有意で一貫した改善を認めた。

【考察】

治療抵抗性統合失調症においても、効果発現は比較的早期である可能性があるとの結果であった。しかし症例によっては、後半のより小さい改善も意味があると思われる。クロザピンにおける早期改善のタイムコースには、薬剤漸増が一因しているかもしれない。対象となった研究およびデータポイントは非常に少なく、結果は予備的なものと考えるべきである。抗精神病薬の早期治療反応に関する問題をより詳細に調査するためには、治療の早い段階からのデータ収集、およびその報告が必要である。